

平成23年度における永生会南多摩病院リハビリテーション科の取り組み

医療法人社団永生会南多摩病院

リハビリテーション科

○ 井出 大、大淵 康裕、亀井 編

【はじめに】

平成23年度に入り、当院は医療法人社団永生会へと承継され3年目を迎えた。承継後、組織および収益の安定化を目標に、永生会からの支援を受けながら、病院全体として事業を推進してきた。ここに平成23年度における南多摩病院リハビリテーション科の取り組みを報告する。

【南多摩病院の概要】

当院は東京都指定二次救急医療機関であり、永生会においては急性期医療の役割を担っている。平均在院日数は17.2日となっており、許可病床数は170床（小児科10床含む）、標榜診療科は内科、消化器内科、呼吸器内科、神経内科、外科、消化器外科、整形外科、泌尿器科、小児科、救急科、透析科、眼科、皮膚科、婦人科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科である。

【平成23年度の取り組み】

1) 入院・外来患者様におけるリハ処方増加と人員の拡充

今年度より常勤整形外科医が1名から2名となり、そのうち1名が手の外科を専門とする医師で、上肢・手指における運動器疾患の処方が増加した。また肺炎を代表とする内科系疾患治療後および外科手術後の廃用症候群による処方が急激に増加した。特にST処方が増加し平成23年1月にはST1名であったが、現在は3名と増員し、さらに1名増員予定である。また廃用症候群の患者増に伴い、ADL能力の向上を推進するためOT1名を平成24年2月より増員した。その結果、平成24年1月現在の実績では、前年比約30%の増収となった。

2) 入院患者層の中心が高齢化と急性期治療における廃用症候群の予防及び改善

入院患者様の平均年齢は78.76歳（外来患者では64.67歳）と高齢化しており、廃用症候群の予防及び改善は、重要なテーマである。そのため「廃用症候群」をテーマにした科内ワークショップの開催、定例勉強会、文献抄読を行い、知識・技術の共有化を推進した。また病棟連携をさらに強化するため、病棟担当性の導入を行い、さらにST部門を中心に早期経口摂取に向けた嚥下食の導入を行った。

3) 教育研究活動の充実

学術集会等での演題発表は6演題、院外での講演・講義は計6件、当科スタッフが行った。また臨床実習生の受け入れを積極的に行い、関東圏内の大学・専門学校を中心にPTでは6校11名、OTでは3校8名を受け入れた。

4) 地域に対するサービスの質の向上

東京都南多摩地域リハビリテーション支援センター、八王子言語聴覚士ネットワーク、西多摩リハビリテーション研修会、NPO法人東京多摩リハビリ・ネットへの事務局支援活動を積極的に行った。

5) 救急医療センター（仮称）開設に向けた準備

平成24年5月に救急医療センター（仮称）が開設予定であり、リハビリテーション科においてはリハビリテーション室の移転を控え、鋭意準備を進めている段階である。